様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　31　日現在

機関番号：32406
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：21730167
研究課題名（和文）F・ナイト研究：その流動性選好説批判および裁量的金融政策支持の論拠をめぐって
研究課題名（英文）Study of a Frank Knight’s case for the discretionary monetary policy and against the liquidity preference theory
研究代表者
黒木　亮（KUROGI RYO）
獨協大学・経済学部・准教授
研究者番号：90364728

研究成果の概要（和文）：
　ニュー・ディール期の金融制度改革に重要な影響を及ぼした初期シカゴ学派の代表者とされるナイトが、ケインズの流動性選好説やマネタリスト流のルールに基づく通貨政策に対して展開した批判の論拠を解明する作業を行い、「シカゴ学派の祖」というナイト像誕生の背景やフリードマンらのネオ･リベラリズムとの異質性を明示するだけでなく、シカゴ“学派”や新古典派、新旧制度学派といった分類法が抱える問題点――従来の経済学史研究が抱える死角――をも浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：
Frank Knight, a neo-classical theorist and a central figure of the early liberal Chicagoans who had a significant effect to the New Deal banking reform, insisted that not only the unitary control of money supply by the federal institutions, but also the positive and discretionary financial policy are necessary to mitigate business cycle. This study of his case for the discretionary monetary policy and against the liquidity preference theory reveals the similarities and differences between Knight and Keynes or Keynesian and later neo-liberal Chicagoans, and so illuminates the blind spots of the conventional taxonomy about these “schools.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済理想
キーワード：フランク・ナイト、経済理論、経済学史

１．研究開始当初の背景

もともと本研究は、2006～07 年度および2008～09 年度に本補助金の受給対象となっていた「F・ナイト研究：シカゴ学派の起源及びその自由主義思想の意義と限界に関する基礎研究」（課題番号：17730142）および「F・ナイト研究：1930 年代の資本論争における彼の理論的・思想的位置をめぐって」（課題番号：19730153）という研究基盤ないしその延長線上に構想されたものである。

過去に積み上げてきたこれらのナイト研究をさらに発展・深化させ、金融危機後の現代社会にも通用しうる経済思想史研究へと射程を広げていくためには、世界恐慌以降にナイト自身が展開した金融政策や貨幣をめぐる議論への理解をさらに深めていく必要がある。なかでも、ジョン・メイナード・ケインズの流動性選好説やマネタリスト流のルールに基づく通貨政策に対してナイトが展開した批判の真意とその理論的根拠を正確に把握しておくことは、ナイト固有の自由主義思想とシカゴ学派のネオ・リベラリズムとの間にある連続性や異質性、さらには今日世界中で希求されている新たな政策思想の糸口を探るうえでも重要な手掛かりとなるはずである。

以上が、本研究の開始当初、念頭にあった問題意識である。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は、ナイトがケインズの流動性選好説やケインジアンの利子理論に対して展開した批判的論考の内在的再構成を行うこと、そうしてケインズとも、ケインジアンとも、ポスト・ケインジアンとも異なるナイト独自の貨幣観や金融政策論を浮き彫りにすることにあった。

と同時に、本研究ではまた、ニュー・ディール期の金融制度改革に重要な影響を及ぼしたとされる「初期シカゴ学派」、すなわちナイトを代表とする経済学者グループの思想的特徴を掘り起こし、1930 年代当時『100%準備』案を支持したナイトが一体なぜ、一見矛盾しているかのようにもみえる裁量的金融政策を支持することになったのか、その論拠を掘り下げることによって、ミルトン・フリードマンに代表される後のマネタリストとの間にある政策観の違いやその理論的背景を浮かび上がらせることも、視野に入れていた。

以上が、本研究の当初の目的および目標であった。

３．研究の方法

（1）資料の調査・収集および整理：

具体的には、シカゴ大学の Regenstein 図書館 Special Collection Research Center において Frank H. Knight Papers を調査し、ナイトが流動性選好説批判や裁量的金融政策支持の立場を明確に主張した晩年の講義録 *Intelligence and Democratic Action*（1960）にまつわる周辺資料、すなわちナイトが 1944 年の暮れ以降、最晩年に至るまで執筆に取り組み、ついに完成させることができなかった幻の著作につながる周辺資料を中心に、収集作業（720 Photocopies）を行った。

（2）訳出作業を通じた具体的論拠の提示：

①ナイトの主要論文を 7 本選抜し、高哲男（九州産業大学大学院教授）との共訳で『競争の倫理――フランク・ナイト論文選――』（ミネルヴァ書房：2009 年 5 月）として公刊、その第 3 章に、ナイト自らケインズやジョン・リチャード・ヒックスの利子理論への批判的解説を行い、積極的で裁量的な金融政策の必要性を主張した重要論文「景気循環・利子および貨幣――方法論的アプローチ――」（1941）を収録した。

また、「フランク・ナイトの複眼――思索の多面性と重層性――」を執筆し、上掲書に訳者解説として発表、その結論部分において、ナイトが資本・利子理論の発展史において果たした役割を「黒子」役として位置づけ、経済学史上の彼の理論家ないし批評家としての限界を指摘した。

②ケインズの流動性選好説やマネタリスト流のルールに基づく通貨管理政策、さらには超低金利政策に対してナイトが率直に語った懐疑的所見だけでなく、裁量的金融政策への支持までもが明言されているヴァージニア大学トマス・ジェファスン政治経済学研究センターでの講義録 *Intelligence and Democratic Action*（1960）を訳出することによって、金融政策や民主的な政策決定過程にからんでナイトが展開した様々な批判や主張の紹介――具体的な論拠の明示――を試みた。

（3）論文の執筆：

上記（1）のような方法を介して収集した資料と（2）のような翻訳作業によってはじ

めて明示しうるナイトの議論など、これまでに収集・整理してきた資料の読解作業や再構成作業を行いながら、以下「４．研究成果」、「５．主な発表論文等」に列挙していく研究報告や論稿の執筆をまとめてゆくことによって、ナイトの流動性選好説批判や裁量的金融政策支持の論拠の一部はもちろん、リベラルな思想家としてのナイトの重要な一面やネオ・リベラルな理論家集団としてのシカゴ学派の多様性を浮かび上がらせた。

４．研究成果

(1) 海外のナイト研究者との意見交換：

International Workshop on the Historical Diversity of New Liberalism: Its Social Philosophy and Economic Design (2011年3月10-11日：九州大学経済学部) で研究報告 “Frank Knight on Liberty and Inequality: The forging character of his critique of the free enterprise system.” を行い、単なる市場擁護論や競争体制への倫理的批判に留まらないナイトの多面的で重層的な自由企業社会分析について論じた。

さらに同ワークショップに参加したナイト研究の第一人者ロス・エメット氏らとシカゴ学派のネオ・リベラリズムの特徴やナイト自身のリベラリズムとの異質性をめぐる議論も行った。

(2) 学術論文の発表：

経済学史学会の機関紙である『経済学史研究』で連載が開始された「Series: Economic Thought of the “Chicago School”」 の第一弾として、論文「フランク・ナイトの経済学・競争体制批判――シカゴ“学派”再考――」（『経済学史研究』第 53 巻 1 号、2011 年 7 月）を寄稿、“シカゴ学派の新古典派経済学者”という従来のナイト像を破壊しうる彼自身の政治的・経済的・倫理的議論を紹介・再構成すると共に、彼固有の自由主義思想の一貫性と体系性を浮き彫りにした。

またこの論文では、ナイトを代表とするシカゴの経済学者グループが 1933 年にフランクリン・ローズベルト政権に提案した金融制度改革案――シカゴ・プラン――の骨子を概説し、ナイトの高弟にしてマネタリストとしても有名なミルトン・フリードマンや、後に規制改革論者として知られることになる弟子のジョージ・スティグラーらとの間に存在する方法的連続性および思想的異次元性に触れるなど、「シカゴ学派の祖」というナイト像が誕生することになった背景はもちろん、シカゴ“学派”やヴァージニア学派、新古典派や新旧制度学派といった分類法や括り方それ自体が抱え込んでいる問題点――いわば従来の学史研究が抱えている死角――なども浮かび上がらせた。

(3) 訳書および訳者解説の執筆：

先述したナイト晩年の講義録 *Intelligence and Democratic Action* を翻訳し（『ナイト社会哲学を語る――「知性と民主的行動」――（仮）』ミネルヴァ書房より今秋刊行予定）、彼が最晩年まで取り組んだ「未刊の著作」の名残である本講義録出版の背景やその今日的意義などについて概説した訳者解説「ありし日の本の幻につかれて」を執筆した。

(4) 一般経済誌への寄稿：

『週刊エコノミスト』第 90 巻 18 号（2012 年 4 月 24 日）のなかにある「経済学者の思想と理論」に関するエッセイ「温経知世」欄に「フランク・ナイト――社会の不確実性を経済学に取り込んだ――」を寄稿、昨今の金融危機や想定外といったキーワードの本質を読み解くうえでも十分に通用するナイトの視点を広く一般に紹介すべく、主著『リスク・不確実性および利潤』（1921）や主論文「競争の倫理」（1923）のポイントや現代的意義の一端を解説した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

① <u>黒木亮</u>、「フランク・ナイトの経済学・競争体制批判――シカゴ“学派”再考――」、査読有、『経済学史研究』、第 53 巻 1 号（2011 年 7 月）：21-43.

〔学会発表〕（計　1 件）

① <u>黒木亮</u>、“Frank Knight on Liberty and Inequality: The forging character of his critique of the free enterprise system”、科研 International Workshop on the Historical Diversity of New Liberalism: Its Social Philosophy and Economic Design (2011 年 3 月 10-11 日：九州大学経済学部)

〔その他〕（計 1 件）

① 黒木亮、「フランク・ナイト――社会の不確実性を経済学に取り込んだ――」、『週刊エコノミスト』、第90巻18号(2012年4月24日）： 52-53.

６．研究組織

(1)研究代表者

黒木　亮（KUROGI RYO）

獨協大学・経済学部・准教授

研究者番号：90364728

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし